

激動・OR

めっきり春らしくなった。事務所の北側は広い公園で小生は時折それを見おろして景色を楽しんでいる。そこには桜の木も数本あって、日一日と色づき今日はもう満開に近い。

明後日は支部の行事として岡崎で省エネルギー・ビルの見学会をやることになっている。そのビルの近くに桜の名所があって、ついでに1泊してお花見をやるということになった。どうもお花見のほうが本音らしい。

拙宅の小さな庭にも菫やヒヤシンスがところ狭しと咲いている。日ごろ手入れをしていない割にはみごとに咲いている。“よし、写真を2,3枚とっておこう”と思ってカメラを戸棚からもち出してみたが、すっかりカビでやられていた。カメラ屋に見せたら分解掃除をすれば使えるようになるというのである。ただし、それには1万5000円位かかるだろうと言っていた。カメラ屋は気の毒そうな顔をして“今はコンピュータを組み込んだ安くていいのが出ていますから、新品を1台張り込んではいかが”と言うのである。結局、分解掃除をたのんだのであるが、たしかに最近のカメラは変わった。マイクロ・プロセッサを搭載して、高性能化、コンパクト化を図っている。部品の数はIC化によって約25%減ったという。それはコスト・ダウンにも貢献している。

時計もそうだ。機械時計はクォーツにとって替わられた。クォーツの腕時計は3000円台から数十万円もする超高級品までであるが、安物でも月差±15秒、電池寿命2年というから機械時計では考えられない精度である。機械時計の時代は部品数が百数十個であったものが、クォーツでは十数個で構成されるという。これがコスト・ダウンをもたらしたのである。しかし、高価なものもあるので、時計屋に“安物と高級品ではどこが違うの”と質問してみた。時計屋はしばらく考えてから“たぶん、側が違うのでしょう、材質、デザイン、金めっきの厚さなど”と真面目な顔をして答えた。時計もここまでくと正確さよりも装身具として位置づけられる。

先月は娘が友達と連れだってヨーロッパ旅行に出かけた。出がけに“イギリスはポンド、ドイツはマルク、オーストリアはシリング、フランスはフラン、ああ面倒だ電卓を買ってくる”とって太陽電池つきの電卓を買っ

てきた。4300円だったそうだ。その時ふと思い出したものはモノローの電動計算機である。小生も昭和30年代には、この計算機を毎日のように使っていた。たしか45万円位の値段だったと思う。娘が買ってきた電卓はそれと互格の機能もっていて、演算速度はむしろ速いのである。しかも、電気は要らないし、小形で軽量であり、ずっと便利にできている。それが1/100の値段で買えるようになったのである。

パーソナル・コンピュータのセールス・マンがよくやってくる。記憶容量が64KBのもので定価37万円といていた。その演算速度など評価してみると、われわれが昭和38年に導入した中形コンピュータ（買取価格約1億8000万円）の能力に匹敵するのである。もっとも磁気テープ装置、プリンターなどの周辺装置を外しての比較であるが、まったく驚くほかない。

このような急速な変化は物事の評価に対しても、めまぐるしい影響を与える。小生にも苦い経験がある。ある省力化を目的としたリアルタイム・システムの計画がまとまったのであるが、その時点での評価では省力効果よりもコンピュータの経費のほうが高くつくという見通しであったので、その計画を中止する手続きをとった。ところが半年もたたないうちにコンピュータの新機種が発表され、そのコンピュータを使用すれば経費は大幅に縮小され、赤字が黒字に逆転することが明らかとなった。いったん中止したプロジェクトを復活するのに苦しい説明を強いられたことがあった。トップ経営者から“半年もたたないのにどうしてこんなに見通しが変わるのか”“君たちは趣味でやりたがっているように見えるがどうか”などの質問が出され、その説明に苦労した。

さて、現代を激動の時代と呼ぶことがあるように、現在は花形産業であっても、それが恒久的に存続するという保証はないのである。おそらく10~20年の間に産業構造は大幅に変化するであろう。こういう時代であればこそ問題をOR的に解析することに意義があると信じている。多数の代替案をダイナミックに評価し、将来に対する不透明さを少しでも解消させれば、それだけ優位に立つことができるからである。

(M.M.)